

| | | |
|---|------------------|---|
| 1 | チーム名 (研究対象領域・教科) | 高等部 日常生活の指導 |
| 2 | メンバー | 高等部教員 7名 |
| 3 | チームのテーマ | これが大事！QOL～生活の質の向上～ |
| 4 | 対象児童生徒に願う主体的な姿 | 高等部 1年A 高等部 3年B 願う姿：自分で考えて自分から取り組むことができる。 |
| 5 | 仮説に至るまで | ・高等部での日常生活の指導は社会参加に向け「社会(周り)からの目」を特に意識することが重要ではないかと考えた。 |
| 6 | 研究の仮説 | ・日常生活の指導では、指導方法について教員間で共通理解を図り、学校全体で同じ意識を持って指導することが大切であると話し合いの中で考えが一致した。このことは他の教科でもいえることではあるが、特に日常生活の指導においては、日々の学校生活の中で生徒に対する教員の意識の違いにより、生徒の成長に大きな差が見られる領域であるのではという意見もでた。 また、個別対応、全体としても小学部、中学部、高等部とそれぞれの学部に合わせて指導があるのではないかと話し合った。その中でも『高等部としての指導』を意識することで、卒業後に主体的に生活するための力につながっていくと考えた。 |
| 7 | 研究実践の内容 | (1) チームで「日常生活の指導で大切にすること」について意見交換。 各学部の日常生活の指導で大切な点はなにか、KJ法を活用し意見を出し合った。 |
| | |  |
| | 小学部 | 基本的な生活習慣の構築、正しいやり方を身につける 役割を理解して取り組む |
| | 中学部 | 習慣化、定着、約束、ルール化、時間への意識 |
| | 高等部 | 「支援」か「自分でがんばるか」の選択 卒業後の生活をイメージしてより必要と思われるものの指導 自分でできることは自分で行い、難しいことへは助けを求める力 社会の目を意識した指導 |
| | | 【共通して大切なこと】 |
| | | ◎自分でなぜやるのか (必要性) を理解して取り組むことができるような教師のかかわり |
| | | ◎発達段階に合わせたかかわり |
| | | ◎「見ること」「聞くこと」「考えること」を意識したかかわり |

(2) 靴の履き間違いが多い生徒に対する教材、アプローチの工夫

- ・対象生徒：生活の中で靴を左右反対に履くことが多い。

課題とした理由

- ・学校生活の中で靴を脱いだり履いたりする機会は多く、そのたびに教師が言葉掛けをしていた。
- ・自分で見て、考え、判断する経験が不足していた。

【使用した教材】

①靴の中に矢印を書く

②興味関心を活かして



教材教具について

○教材を使用することで教師の見方が変わる

→できるのではないかという期待。教材に対してどう変化するのか、意識するのか、できないならなぜできないのか、どこに課題があるのか等、個別の課題の把握につながる。

●教材使用前は「また間違えている」「今日も間違えている」→「靴反対だよ」と言葉掛けをしていた。反対の言葉で履き替えることはできたが、自分で考える、気づかせるという教師側の意識が足りていなかった。

教材の前の言葉掛け

→忙しい日々で、どうしても教材をつくる時間が確保できないときや教材は必要だけどどんな教材が良いのか思いつかない時は【言葉も教材】であることを意識する。

特に対象生徒は、擬態語や擬声語「トントン」「ガッチャン」「ぱたぱた」等の言葉掛けは対象生徒には効果的であった。

(3) 正しい手順で手洗いをするための教材、アプローチの工夫

- ・対象生徒：一通り手を洗うことはできるように見えるが、正確ではない。

課題とした理由

- ・作業学習、現場実習等で清潔を求められることがあった。
- ・改めて手洗いの様子を観察すると、自己流に進めてしまう様子が見られた。

【使用した教材】

①手洗いの手順表

②ハンドソープ

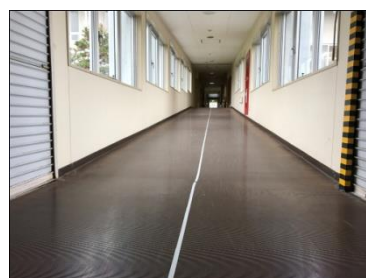


教材教具について

- ・①の手順表を水道場に置き、継続して使用した。
- 教師と一緒に確認ができる場面では、手順表を意識して順序を意識しながら洗うことができたが、一人で行う場面では自己流（手を濡らさずに洗ってしまう）で行うことが見られた→本人が「手を濡らして洗う」必要性を感じていない。
- ・ハンドソープを準備した。
- ジェル状のハンドソープを準備した。手を濡らさなければ泡が立たない→必ず手を濡らすようになった
- 決まった場面でなくてもできるようになるのは難しい→般化、定着できるような教材教具、支援

（４）廊下を正しく歩くための環境設定について

- ・仮説を踏まえ、学校全体で取り組むことのできる教材教具の設定が必要であると考えた。その取り組みの一つとして全学部共通で使用する廊下の中心にラインテープを引くことで学部関係なく、教員が同じ意識を持ちながら「右側を歩く」という指導ができると考えた。



右側歩行を意識していますか？

- ラインテープを貼ったことで右側歩行を意識する人が多く見られるようになった。
 - きまりやルールを守ろうとする意識が高まる。
 - ラインテープがない場所でも意識していく必要がある。
 - 意識はしているものの定着にはまだ時間が掛かる。
- 改善策：各学級の日生で取り上げて指導する、生徒会からの発信
- 教員の意識に差が見られる。

8 成果と課題（～実践を通して～）

- なぜ靴を正しく履くのか、なぜ手洗いをするのか等「子ども自身がその必要性を理解すること」で「自分からやる」「自分で考えて直そうとする」等の意識につながっていく。その為には教員が「指導の必要性」を理解して指導しなければならない。なぜこの指導が必要なのか、教員間で共通理解を図りながら学校全体で指導していく体制が必要であると感じた。
- たとえ今できないとしても諦めるのではなく、先を見据えた指導を心掛けることが大切である。
- 特に高等部での日常生活の指導は生徒の卒業後に必要な能力を考慮して進路や生活の環境、形態等に合わせた指導に取り組むことが大切である。
- 日常生活の指導を充実させるためには、保護者との連携が必要である。学校生活をする中で教員が生徒に必要と感じた能力であっても、保護者が必要としていなかったり、家庭での言葉掛け等がなければ生徒への定着を図ることはできない。その為にはなぜこの能力が必要で指導をしたいかということを保護者に説明し理解してもらい、学校と家庭が同じ意識をもって生徒の日常生活を充実させる体制を作ることが大切である。